



『関西企業ヒストリア』 ～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第20回 創業 1947年(昭和22年)

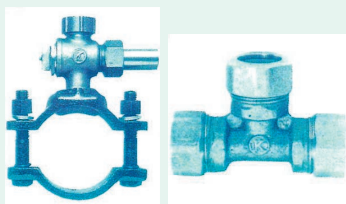
株式会社 光明製作所

ものづくりの町、大阪市生野区で 光明製作所が誕生

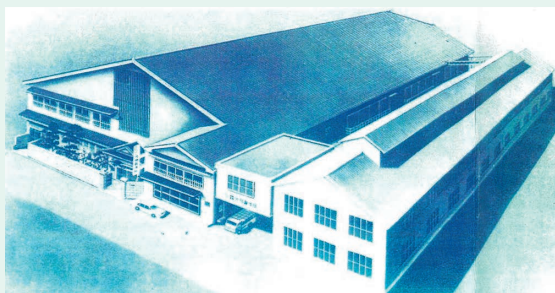
1947年▶ 創業者の金村秀夫は、かつて鑄造工場で1,000ミリ以上の大口径バルブの製造に携わっていました。1947年、秀夫はその経験を活かし、大阪市生野区巽西代町に砲金鑄物の生産を目的とした光明製作所を設立しました。

第一次世界大戦後の大阪は「東洋のマンチェスター」とも称される工業都市に成長しており、さらに第二次世界大戦後には、堺泉北臨海工業地帯が整備され、造船、化学、エネルギーなどの工場が立地するとともに、大手家電メーカーの進展などにより機械金属工業が目覚ましく発展していました。

そのような時代の中、鑄造技術の確かさが高い評価を受け、1951年には検査体制を整えて、加工から組立、そして完成品へと事業を拡大していきました。これがメーカーとしての光明製作所のスタートです。



上：当時の取扱製品の一部
下：生野区時代の社屋全景



ISO認証取得で オンリーワンの製品づくり

1967年▶ 1967年、株式会社光明製作所として法人化を遂げると、設備の拡大や営業所の開設など、順調に製品の安定的供給環境を整えていきました。

1976年には現・取締役会長で秀夫の次男である金村時喜が入社し、工場の近代化や水道器具の改良改善・発明を次々に進めていきました。

1990年、社長のバトンが秀夫から時喜に渡されると、「品質第一」を基本方針として、多品種少量生産の中で顧客の困り事や、「こんなものはできないか」という声を聞きながらその実現に努めました。

1997年には「マルチ止水栓」で大阪府の発明実施功労賞を受賞するという栄誉に輝きました。受賞した「マルチ止水栓」は多機能な性質を持った流量調整型逆止弁付伸縮止水栓で、様々なニーズに合わせた製品があり、多くの水道事業体に導入され高い評価を得ました。折しも1997年は創業50年の記念すべき年、光明製作所は二重の歓喜に沸きました。



右：フランジ付 マルチ止水栓
ボール式止水栓 + 逆止弁 + 伸縮管 + 流量調整



左：マルチ止水栓
ボール式止水栓 + 逆止弁 + 伸縮管 + 流量調整

「品質」と並んで大事にしたのが「環境」です。製品や企業活動を通して環境に対して何かできることはないかと考えた結果、1998年3月にISO9001品質マネジメントシステムの認証を、2000年12月にISO14001環境マネジメントシステムの認証を取得しました。

認証取得までの道のりは決して平坦なものではありませんでした。ISO14001については、工場や事務所から出る大気、騒音、水質など、あらゆる項目において条例や法律への適合などが問われます。しかし各部門長をはじめ、社員が率先して課題に取り組んだことが、短期間での認証取得につながりました。



ここが
転換点

仮設配管を廃棄から循環へ リユーズシステムを開発

2001年▶ ISO14001の認証取得を機に、時喜は「新たに環境にやさしい商品を」と奮起し、2001年、仮設配管資材のレンタル「リユーズシステム」を開発しました。

一般的な水道管の更新工事などでは、仮設配管を布設して断水させることなく工事を行います。この仮設配管には多くの場合、コストのかからないビニル管が使われているのですが、耐久性などの点から再利用が難しく、使用後は廃棄されるケースがほとんどでした。

リユーズシステムでは、これまで培った給水器具メーカーとしてのノウハウを生かし、施工面や柔軟・軽量性に優れ、再利用性も高い配水用ポリエチレン管を使用。事業者へレンタルした配管材料一式は洗浄・殺菌し、リユース（再使用）可能にすることで環境負荷の低減に取り組みました。



【仮設配管】使用頻度、配管材料を処分するのではなく、メンテナンスを行うことで何度でも使用できるようになります。

【再使用可能】何度でも再使用可能な仮設配管材料をレンタルすることで余計な処分費用が発生せず環境にも影響を与えません。

また、現場で使われ回収した配管は予想以上に汚れがこびりつき、既存の洗浄システムでは対応ができませんでした。全自動洗浄殺菌装置を独自に開発し、水質の安全性確保に万全の状態を整えました。

ただし、ここまでたどり着くには様々な苦労や試行錯誤がありました。まず、仮設配管用の管種の選定には、ある程度の曲がり耐える、柔軟で耐震性に優れ、リサイクル性の高い管という条件で検討する必要があり、様々な材質の中から配水用ポリエチレン管を選びました。何度か繰り返し使用しても最後に廃材になれば、環境に負荷をかけることになります。そこで、使用後のポリ管を粉碎・ペレット化し、表示杭や埋設標識シート、明示テープなどの二次製品に再生する体制を他企業の協力を得て整えることができました。また継手についても、熟練者でなくても誰もが扱え、施工品質が安定するように、作業性、施工性に優れたジョイントを開発しました。すべては品質と環境、信頼性確保にこだわり抜いた結果でした。



リユーズシステム 施工事例

さらなる発展を目指し本社工場を移転

2015年▶ 2015年5月、創業の地である大阪市生野区を離れ、本社工場を和泉市の「テクノステージ和泉」に移転しました。約2万3,200平方メートルの敷地に本社・工場棟を新設、鋳造や機械加工、製品の実験設備を一新するとともに、マンションなど中高層建物向けの給水材料の開発・試験などに対応する縦型実流実験棟を整えました。



左：本社・工場 右：縦型実験棟

また 2017 年には、日頃から工場緑化の推進に努力し、周辺地域の生活環境の向上に貢献しているとして、一般財団法人日本緑化センター主催「緑化優良工場等表彰」奨励賞を受賞しました。顧客や近隣の方々に対し「おもてなしの心」という思いから、工場、事務室、トイレおよび工場敷地周辺の清掃と緑地の管理は、毎日分担して全社員で行っています。

光明製作所の社是に「あいさつ、服装、トイレから」という言葉があります。あいさつをする、服装を正す、掃除をする、時間を守る、感謝の気持ちを表すなど、できて当たり前のことをきちんとしようという、創業者の言葉です。二代目の時喜は経営者として「凡事徹底」を心がけてきました。「凡事徹底」とは、何でもない当たり前のことを徹底的に行うことであり、当たり前のことを極めて、他の追随を許さないことです。先々代、先代の理念が、今も光明製作所のものづくりを支えています。



二代目 金村時喜氏

新たな水と環境の可能性を探し、豊かな生活を明日へつなぐ

2017年▶ 光明製作所は2017年に創業70周年を迎えました。蛇口をひねると水が出てくるのが当たり前のように感じますが、災害時などに断水するとたちまち普段の生活が立ち行かなくなるライフラインの代表格が水道です。張り巡らされた水道本管から各世帯への給水を担うのが光明製作所の給水装置です。重要な役割を果たしながら同社の名前が表に出ることは少ないですが、世の中の課題解決のために付加価値の高い製品づくりを続けています。

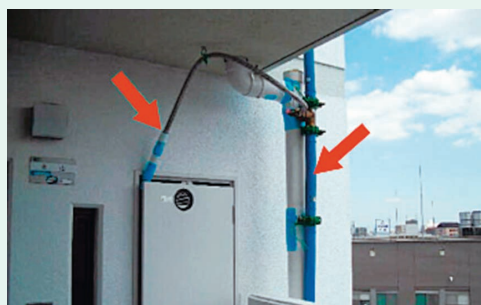


光明製作所が参加する防災訓練セミナー

また、光明製作所では、製品供給を通じて、全国の水道事業体および関係団体と「災害時における仮設配管資材の調達に関する協定書」を締結し、いざという時には給水資材や水道本管用の仮設材料の優先的な供給で、一日でも早い水の供給再開の手助けをしています。

加えて、災害時などの断水時に飲料水が確保できるよう仮設応急給水栓も開発しました。光明製作所は、自治体や関係団体と連携しながら、防災訓練への参加など、減災、防災及び緊急時の支援体制の構築に積極的に取り組んでいます。

2018年からは、集合住宅用給水設備配管の更新工事の際に避けられない断水時間を、入居者の日常生活に支障がでないよう極力短縮するため開発した集合住宅専用仮設配管レンタルサービスを開始しました。環境負荷を軽減するとともに、災害発生時の集合住宅における水道復旧にも対応していきます。



リユーズV 施工事例

水道事業を基盤に新たなフィールドへ

2021年▶ 2021年、金村哲志が36歳の若さで新社長に就任しました。我が国では人口減少や地方の過疎化により給水人口や給水量も減少し続けており、水道関係者にとって未だ経験したことのない時代が到来しつつあると言えます。限られた市場で勝ち抜くためには、最終的に製品が使用される水道工事に入り込み、KOMEIの製品を必然的に採用される仕組みを創出し、事業規模の拡大に繋げていきます。また、給水装置にもIoTの仕組みを取り入れ、遠隔操作ができるバルブの開発に着手するなど働き手の減少など社会情勢の変化にも対応、貢献していきます。加えて、近年の企業の経営課題であるSDGsやカーボンニュートラルに真摯に取り組みながら、経営理念でもある「豊かな生活を明日へつなぐ」基盤づくりを目指し、100年企業へと挑戦していきます。

株式会社 光明製作所

本社所在地：大阪府和泉市テクノステージ1-4-20

従業員数：110名 資本金：2,000万円

事業内容：サドル付分水栓・止水栓・応急給水栓など給水器具、
仮設配管資材レンタル、集合住宅専用仮設配管レンタル